

北海道における通夜説教の実状

本 間 文 裕

平成二十七年八月に北海道教区の夏期講習会において、教化研究会議のテーマを『有縁の未信徒へのアプローチ』—如何に葬儀・法事の意義をつたえるか—と題しました。まず、「未信徒」の定義をどこに置くのかを討議しました。次世代の檀信徒（子どもの代）は有縁ではあるけれども、信仰を引き継がないという傾向にあり、「未信徒」と同等と捉えるべきであろうという結論に至りました。テーマを『有縁の未信徒へのアプローチ』としますと、葬儀や法事の場合が絶好の布教の機会となり、特に通夜説教と法事の説教を中心に、これからのように教化したらよいのかを教化研究会議で話し合うことにいたしました。

教化研究会議の最後に、現代宗教研究所長三原正資様に講評を頂きました。講評の中で所長様より、北海道におけるこの通夜説教の習慣の素晴らしさを、全国に発信して欲しいというお言葉を頂きました。そのお言葉によって私たちは初めて大事な意義に気付くことができました。それまで私たちは葬儀の場で通夜説教をすることは、当たり前だと思っておりましたが、全国的に見てもそうではなかったことに驚きを感じました。

北海道では本宗において約九十五％は葬儀の際、通夜後に説教が行われているという実態がございます。

通夜説教をしない場合の残りの五％は僧侶自身の体調不良時であったり、同じ日に葬儀が重なるなど、物理的に通夜説教ができない場合も含まれるので、慣習としてはほぼ一〇〇％に近い数値で行われていると言っても過言ではありません。私自身も教師になって十六年になりますが、葬儀の際に通夜説教をしなかったことはございません。

ではなぜ当地において、これだけ高い数値で通夜説教が行われるようになったのかと申しますと、

北海道は言うまでもなく開拓の地でございます。明治の時代に日本全国から屯田兵として沢山の人たちが入植して参りました。その中でもどのような人々が多かったのかと申しますと、一家の長男ではなく次男、三男といった分家の方々でした。開拓地だからこそ仏事を頼む菩提寺を自由に選べたということが、北海道の布教活動を盛んにした要因の一つに挙げられます。また当時は何もない時代でしたので、僧侶の説教を娯楽（楽しみ）の一つにされていた人も多かったと聞かされております。だからこそ人々は説教を非常に親しみやすく、身近なものと感じることができたのでしよう。

北海道の布教に來られた僧侶の間では、今まで故郷の地では檀家は定着しており、宗派・菩提寺を変えるということとはほとんどなく、とくに他宗派からの改宗はほとんどなかったと思われれます。しかし北海道という新天地では、とくに宗派にとられない、菩提寺が決まっていないう方々が、ほとんどであったと考えられます。檀信徒はまだ定着していなかったため、僧侶も檀信徒の獲得のため、分家の未信徒の方々を教化することに一生懸命尽力されました。中でも不特定多数の地域の人が訪れる葬儀の通夜説教には、力を注ぎ布教活動されたのでございます。

僧侶一人一人が一生懸命布教できる環境が整っていた為、未信徒教化に励むことができ、他宗派の檀信徒の方々を布教によって改宗させることができたので、とてもやり甲斐があった事だったのでしよう。

そういった中で葬儀という機会は地域の人が沢山訪れる場所であったために、第一線の布教の場として葬儀の際に通夜説教をするという習慣が、北海道では徐々に根付いていったのだと考えられます。

実際にあそこのお坊さんのお説教はとても有り難かった、素晴らしかったということだけでそこのお寺の檀家になりたいと感じた方、檀家になった方、他宗派から改宗された方々も沢山おられたと伺っております。

当地では現在でも世間の人々の近所の会話の中で、あのお坊さんのお説教は良かったとか悪かったとかという事が、

日常の話題として普通に出てくる実状がございます。説教に対してシビアに批判されることはとても厳しいことです。他宗の僧侶との比較も頻繁にされます。北海道の人々は葬儀に参列し通夜説教を聞く機会が多いので、説教に対して耳が肥えている方がとても多いのです。私どもはいつもその厳しい評価と隣り合わせに布教しております。通夜説教のことがついてまわり、どこか緊張した状態が続いているのです。

こういった緊張感の中で葬儀の際に通夜説教だけではなく、葬儀自体に対しても意識を高く持たれている僧侶の方々が多いと思われまます。

教化研究会で集めたアンケートの中から、どのようなことを入れて葬儀や通夜説教をされているかという例を挙げますと、

- ・まず相手の立場に立ち自分ならどのようなことを言われないかを考えることが大事である。
- ・枕経の時から既に葬儀は始まっている。亡くなった方の遺族の目の前で経帷子を書くといい。
- ・経帷子に書かれる大曼荼羅の説明をし、死後故人はこれから何処に向かうのかというお話をして信仰を持ってもらう。逆に遺族の中で仏教の教えに対して聞きたかったこと知りたかったことを質問してもらい、仏教の教えに触れてもらう場所であるので枕経の時から力を入れている。
- ・都市部以外の小さな町の僧侶は、葬儀に参列する町の住人はいつも同じ人々なのでいつも違った法話をしなければならず、常に緊張した状態で通夜説教に取り組んでいる。
- ・私たちが幸せに生きるために亡き故人・先祖に感謝し生きていくことを知らせ、安心して成仏を願えるように感じてもらえる法話をする。
- ・葬儀は命と人の尊さ、有り難さを教えていただける得難い場であることを感じてもらう。
- ・霊山往詣を祈る。遺族の癒し。社会への周知。故人が最後に功德を積む場（仏縁に触れさせる）である。

・ 肉体がなくなっても本体である靈魂は永遠であり、生まれ変わり命を受け継いでいる。魂が迷わないように行き先を示す。

・ 死後の世界を信じている人は年代層によってかなりの偏りがある。会葬者の年代にも配慮して説教する。

・ 葬儀のみ行う方が増えてきているので、今後の信仰につながる様な法話に心がけている。

・ 法号を付けなくてもいいという方が増えてきている。きちんと法号の意義を説明する。

このようにそれぞれの僧侶一人一人が、問題点や改善点に日頃から取り組み、どのように通夜説教や法事の説教をしていくかということを試行錯誤しております。

北海道は広い所ですので、地域によっても葬儀や土地に根付いた風習が違います。お互いに意見交換をしながら研鑽し合って法話の質を向上させているのです。私たちは平成二十三年の教化研究会議より問題提起をして、葬儀・通夜説教・我々僧侶のあり方を研鑽して参りました。

このアンケートは教化研究会議の分散会の座長用の資料として用意したもので、回収するつもりは御座いませんですが、参加者の方の意識が高く、何かに使ってほしいと要望がございましたので、集計し一部紹介させていただきます。

北海道出身の文学者である三浦綾子さんの葬儀の際に、キリスト教の牧師さんのお説教の中で、「人は二、三日の旅行でもガイドブックを購入し地図を広げて行き先を確認します。それなのにあの世という全く未知の長旅に準備もしないというのは何故でしょうか？」と、その場にいた人に問いかけられたそうです。今「終活」ということがよくテレビ等に取り上げられております。「終活」とは人生の終わりをより良いものにするために、事前に準備を行うということ。ですがはたしてその終活の最後にあの世へ安心して旅立つための地図でも頂けるのでしょうか？

宮沢賢治さんの『銀河鉄道の夜』でジョバンニがしっかりと握っていた、どこへでも行ける「緑の切符」の買い方

でも教えて頂けるのでしょうか？　どこの書店に行ってもあの世の地図は置いておりません。駅構内の切符売り場に行ってもどんな旅行者さんの所でも、「緑の切符」は予約してはいただけません。檀信徒の葬儀を務める私たち僧侶は、果たして確実に地図である世の行き先を示し、確実に「緑の切符」を手渡せているのでしょうか？

本宗では言うまでもなく亡き方の行き先は「靈山浄土」であり、葬儀の引導文には大聖人がお待ち下さることを「安心」と伝えております。この「靈山往詣」する為の地図をもっと明確にもっと的確に示して行くことが、世間で地図を求めようとするとする人、すなわち死後に不安を感じている人に関心を持ってもらえるのではないのでしょうか？世間の人々がいつも感じている「亡くなった人はどこに行くの？」という問に対し、仏教は漠然とした答えしかしていないという指摘の中、私たちが日蓮宗の僧侶も「靈山往詣」という僧侶だけの論理ですましていないか、しっかりと檀信徒に届いているのか、今一度私たちが僧侶は「来世」「靈山往詣」「靈魂」等に真剣に向き合い、通夜説教の中で次世代の檀信徒に何をどのように伝えていかなければならないのかを考えなければなりません。

「亡くなった人はどこに行くの？」の問いに「解からない」ではいけません。私たちが僧侶はエキスパートでなければならぬ。私たち僧侶だけが知っていても駄目なのです。檀信徒・世間の人々と同じ目線で物事を捉え、説いていかなければなりません。檀信徒や世間の人々へ僧侶から明確な説明をする義務があることを忘れてはなりません。次世代の未信徒が信仰に対し、興味を持ち実践できるように、我々僧侶が一人一人責任を持ちよく対話し、魂の存在を伝えていくことがこれからの課題です。

また、北海道では毎月命日に「月忌参り」の風習もあり檀信徒と触れる機会が非常に多いためか、「直葬」「無宗教葬」「お別れ会」という形はまだ浸透しづらい状況と感ずますが、これからの時代は急速に変化していくことでしょう。

十年先、二十年先を見据えて時代に合った布教をすることが大事になってきます。

私たちは日頃から檀信徒と触れ合う「月忌参り」という、とても恵まれた環境を活かしながら、通夜説教だけに留まらず、やはり普段から檀信徒・未信徒の教化に力を入れ、僧侶自身が檀信徒・世間の人々に、信頼され・任せられ・有り難い、と思っていただけの僧侶の姿を目指していくことも、同時に行っていかなければなりません。普段からのコツコツと積み重ねる行いがとても重要であると考えます。

私たち北海道の僧侶はこれから先も通夜説教を通して地域に根付き、こういったプレッシャーと責任を感じながら、これからも日々の布教並びに通夜説教の研鑽をしていかなければならないと深く感じております。